



春から夏へ

テトラクリスタルアイランド

時期は真夏の前の春が終わろうとした頃。

テトラクリスタルアイランドでは仲良し4人組が島の中心へと向かっていた。

「ふう、もうこんな時期だなんて全然気がつかなかったな。」

「ええ、この島にはソコまで変わったことがこないからね。」

四季を操る力のある四神

その四神達が住んでいる架空の島がここ、テトラクリスタルアイランド。

本日は季節を春から夏に変える日。

そのために4人はその儀式をするために、島の中心へと向かっている。

「さて、付いたぜ。」

島の中心は森の一角をくりぬいた感じの場所で、木が無く、中心には自然に出来た泉があるだけの静かな場所。

その泉には宝石が浮いている。

「じゃあ、よろしくなアルドール。」

「ええ。」

アルドールと呼ばれた彼女は四神の一人、朱雀。

彼女が今回の仕事をする張本人。

春から夏へと変える儀式。

アルドールは泉の中心へ降り立つと、持ってきた扇を取り出し、踊りだした。

それと共に浮いていた宝石たちも回り始め、素敵な舞が披露される。

他の四神たちは泉から少し離れた場所でその舞を見ていた。

しばらくアルドールが踊り続け、舞が終わった。

すると島の上空には段々雲が出来始めた。

そう、梅雨前線の雲が出来始めたのだ。

しばらく大きな雲が島の上に出き、大きくなっていく。

そしてそのまま、大量の雨が島に降り出した。

雲は島に雨をもたらしつつ、どんどん大きさを広げて行き、他の島にも雨を運んでいった。

「ふう。」

舞を終え、アルドールは他の四神達の下へ。

「お疲れ様。 とっても綺麗だったわよ。」

そういったのは玄武のジョイ。

彼女も四神の一人。

「初めてだから少し緊張しちゃった。」

「でも本当綺麗だったぜ。見とれちゃったぜ。」

ジョイの隣でそういったのは白虎のピスフリー

彼も同じく、四神の一人。

その隣にいる龍もまた、四神の一人。

「コレで他の島に夏が到来するな。 お疲れ様。」

彼の名前はストレンジャー。

彼もまた、四神の一人で青龍なのだ。

3人は微笑みつつ、それぞれ舞いについての一言を述べた。

アルドールはそれぞれの感想を聞き、一安心。

でも一人のコメントは聞いたあと、あまり一安心はしていなかった。

『うう、やっぱりお父さんたちが言っていたことが気になっちゃうな・・・ そんな事、あんまり考えたこと無かったから。』

アルドールはそう思いつつ、気になる彼を見ていた。

「アルドール、どうかしたか？」

「え！？ う、ううん。 なんでもない。」

「？」

彼女が気になっている彼とはストレンジャーの事。
アルドールはそう言っておきながら顔を少し赤くしていた。

「そろそろ戻ろうか。 儀式も済んだことだし。」

「うん。 そうだね。」

「アルドール、じゃあねー」

「うん。」

4人はそれぞれ、自分が管理するエリアへ戻っていった。
4人が島の中心を離れると、梅雨の雲も、他の島へと旅立っていった。

南側 草原エリア

3人と別れ、自分も納めるエリアへ戻ってきたアルドール。
でもいつもと違い、やはり顔が少し赤い。

「お、お帰りアルドール。」

「ただいま、お父さん。」

部屋のリビングにいたのはアルドールの父
父親は帰ってきた早々、アルドールに言った。

「何だ顔赤くして。 何かあったか？」

「え！？ な、な、な、なんでもないよ！??」

明らかに凶星を付かれ、驚きを隠せないアルドール。
父親は軽く苦笑して言った。

「ソコまで驚くことじゃないだろ。 悩み事なら聞くぞ？」

「な、悩みなんて無いもん！」

アルドールはさらに顔を赤くして自室へ駆け戻っていった。

自室へ猛スピードで戻ってきたアルドールはそのままベットへ。

『ううー、お父さんにバレてる・・・ どうしようー』

アルドールは悩みと良くわからない気持ちに襲われたまま、ベットの上でゴロゴロと回っていた。

東側 砂浜エリア

変わってこちらは東側の砂浜エリア

3人と別れ、ストレンジャーは家を目指して森を進んでいた。

しばらく進むと花畑に。

「最近、花が綺麗に咲いてきたな。」

ストレンジャーの前には様々な花が咲いていた。

ストレンジャーは自分の近くに咲いている水泡草を摘み、花へ水をやった。

花は水を浴び、さらに綺麗に咲いているように見せた。

「少し、摘んでいくか。」

ストレンジャーは数本、花を摘み、家へと持って帰っていった。

「あ、お帰りなさいストレンジャーさん。」

「ただいま、ビリーブ。」

森から出ると、出迎えたのはストレンジャーの家に居候しているビリーブ。

彼はストレンジャー達同様、普通の犬ではなく、狒犬なのだ。

「母さんは？」

「ちょうど買出しに出かけました。」

「そっか。」

「ストレンジャーさん、その花は？」

ビリーブはストレンジャーの持っていた花を見て言った。

「ああ、ここへ戻ってくる途中に咲いてたやつなんだ。 家に飾ろうかと思って。」

「確かに綺麗な花ですもんね。 じゃあ僕が置いてきます。」

「ああ、たのむ。」

ストレンジャーは持っていた花をビリーブへ預けた。

「あ、そうだストレンジャーさん。 もう一つ言いたいことがあったんです。」

ビリーブは家へ行こうとしていた所で振り返り、再びストレンジャーに話を振った。

「なんだ？ ビリーブ。」

「今のところ、コレといって変わったことが無いので、テイルスさんの所へ遊びに行きませんか？」

「そうだな、そろそろ遊びに行ってみるか。」

「じゃあ僕は花を生けたら行きますので、先に泉に行ってください。」

「ああ、わかった。」

ビリーブは話を終わると、再び、ストレンジャーの家へ戻っていった。

ストレンジャーは今度は歩いてでは無く、翼を広げ、先ほどの泉へ向けて飛んで行った。

泉の庭園

ストレンジャーが一人、島の上空を飛んで行くこと数分。

先ほど春から夏への儀式を行った、泉の庭園へと戻ってきた。

大きく広げた翼を羽ばたかせつつ、ストレンジャーは地面へ降り立った。

周りには誰もいない。

ストレンジャーはそのまま宝石の浮いている泉へと向かっていった。

泉はある場所とをつなぐ入り口でもあるのだ。

ソニック達のいる、ミスティックルーインの近くにある、トロピカルアイランドに。

『しばらく忙しくて、行ってる暇が無かったからな。 テイルス、寂しがってるかな。』

ストレンジャーはそう思いつつ、泉に浮かぶ宝石を眺めていた。

しばらく待つと、ストレンジャーの後ろから声が。

「ストレンジャーさん。 お待たせしました。」

やって来たのは先ほど会話をしていたビリーブだった。

「じゃあ行こうか。」

「はい。」

ストレンジャーはワープのための道を開こうとした瞬間。

ガサガサ・・・

不意に後から物音が。

「誰ですか？ そこにいるのは。」

ビリーブは物音のした方向に向かって言い放った。

右手にはいつの間にか破魔矢が握られていた。

「私よ、ビリーブ。」

物音がした方向からは、アルドールが出てきた。

「アルドールさんでしたか。」

ビリーブは敵では無いことを確認し、破魔矢をしまった。

「どうしたんだ？ アルドール。」

ストレンジャーはアルドールを見つつ言った。

「ちょっとエミーさんに用が出来たので。 いっしょに行ってもいい？」

アルドールはいつもの表情で言った。

「ああいいぜ、じゃあ3人で行こうか。」

ストレンジャーはアルドールへOKを出し、ワープへの道を開く作業をした。

『まさかストレンジャーがいるなんて思わなかった・・・』

アルドールはストレンジャーの後ろで顔を赤くしつつそう思い、道が開くと2人と共にワープゾーンへと入っていった。

3人がワープすると、別の方の草むらからまた物音が。

「やっぱり、そういうことだったのね。」

「ジョイの言っていた事が、当たったな。」

その様子を見ていたのはピスフリーとジョイだった。

「最近なーんかアルドールの様子がおかしいと思ったら、ストレンジャーのことだったのね。」

「でもまだ決まったわけじゃないだろ？ 決め付けるのは早くないか？」

ピスフリーはジョイの意見に疑問を投げかけた。

「ピスフリーは鈍いわね。 恋なんてきっかけがあればどこにでも芽生える種なのよ？ 無いともいえないじゃない。」

「まあ確かにな。」

ジョイは指で円を描くようにクルクルと回しつつ、ピスフリーへ言った。

ピスフリーも多少納得しつつ言った。

「そうすると、恋を押しするためのキューピッドがいりそうね。」

「おいおいジョイ。まさか俺たちがやるのか？」

「こーんな面白いこと無いじゃない☆ こうなると結末を見るまでよ♪」

ジョイは乗り気だが、ピスフリーはやや引き気味の様子。

本来ソコまで意見が合うことの無い二人なので、普通なのかもしれない。

「さてと、そうなるとデートのためのスポットを探さなくっちゃね☆」

ジョイはノリノリで家へと帰っていった。

『まったく、ギャンブルの次に楽しい事を見つけると一直線だな。』

ピスフリーはそんなジョイを見つつそう思っていた。

『でもま、恋なんて実るかどうかわかんないからな。 結末はわかんねえか。』

ピスフリーは多少苦笑しつつ、ジョイの元へ向かっていった。

ー続くー

ミスティックルーイン

テトラクリスタルアイランドからミスティックルーインへやってきた3人。
そこからは二手に別れ、ストレンジャーとビリーブはテイルスの元へ
アルドールはエミーの住んでいるアパートへ向かっていった。
テイルスの工房へとやってきた二人は工房内へ

「テイルスー いるか？」

「あ、いらっしゃいストレンジャー、ビリーブ。」

ちょうどリビングにいたテイルスが二人を出迎えた。

「ちょっとしばらくこれなかったけど、遊びに来たぜ。」

「ゴメンね、忙しいのに来てもらっちゃって。」

テイルスはちょっと申し訳なさそうに言った。

「いや、ソコまで忙しくないからいいって。」

「そう？ よかった。 あ、そうだ。」

テイルスは一回リビングに戻り、何かを持ってきた。

「ちょっと前に近くにテーマパークが出来たんだって。 よかったら後日行かない？」

テイルスが持ってきたのは先ほどまで読んでいたチラシだった。
それを受け取り、内容を読んでいく二人。

「えっと、ミラージュキャッスル？」

「近くに出来たのか。 最近ここら辺見てなかったからわかんなかったな。」

ストレンジャーとビリーブはチラシを見て大体の場所と内容を確認した。

「どうかな？ 出来たばかりだから特典で、団体で行けば一日タダなんだって。 ソコまではカレントで行けるから。」

「そうだね、せっかくのお誘いだし。」

「たまには族長も羽を伸ばしてみるかな。」

「決定だね。」

二人の意見が合い、行くことになった。

「じゃあ3日後でいいかな？ こっちもソニック達に聞いて見るから。」

「こっちもピスフリーやジョイに聞いてみるから。」

「わかった。」

3人はテーマパークへのプランを立てていった。

一方、ストレンジャー達と別れたアルドールは一人、エミーのアパートへ向かっていた。

コンコンッ

『誰ー？』

「私です。 アルドールですエミーさん。」

アルドールはエミーのアパートの扉をノックし、エミーを呼んだ。

「あ、いらっしゃいアルドール。 どうしたの？」

「ちょっと相談したいことがあって・・・」

アルドールはちょっと顔を赤くしつつエミーに言った。

「いいわよ、どうぞ。」

「お邪魔します。」

アルドールはエミーのアパートへ入っていった。

「で、どうしたの？」

エミーは紅茶の入ったポットとティーカップを持って来つつ言った。

「ちょっと悩みがあって・・・」

「とりあえず、これどうぞ。」

エミーはカップへ注いだ紅茶をアルドールへ渡した。

「頂きます。」

アルドールは紅茶を一杯飲んだ。

「おいしい！」

「よかった、口にあって。最近買ったばかりの紅茶なの。」

「そうなんですか？ でも本当においしい。」

アルドールは紅茶をさらに飲みつつ言った。

「じゃあ本題いこっか。顔を赤くしてまで抱えてる悩みって何？」

「じ、じつは・・・」

アルドールは抱えていた悩みをエミーに話した。

「なるほどね。普通に考えると、恋ね。」

「やっぱり・・・」

「でも、まだ根本的に好きって部分が無いのよね。」

エミーは先ほどまで聞いていた話を思い出しつつ言った。

「だからちょっと悩んでるんです。」

「だとしたら、調べるしかないわね。」

「調べる？」

アルドールはエミーに問いかけた。

「デートよ、デート。」

「デ、デート！？」

アルドールはさらに顔を赤くしつつ言った。

「そうよ、好きなら好きでデートよ。何も無ければいつも通りにこなせるわ。最後はアタックよ！」

エミーは理想のデートプランを考えつつ言った。

心なしか少々輝いている。

「で、でもデートなんてそうそう簡単にできますか？」

「問題はソコなのよね。」

エミーは一番肝心なきっかけが無いことに少々考える。

「何かあればいいんだけど。」

コンコンッ

「誰？」

『エミー、僕だよー』

「あらテイルス？」

エミーはリビングから少々かけつつ入り口へ向かっていった。

アルドールもあとへ付いていく。

「いらっしゃい、どうしたの？」

「さっきストレンジャー達と話してたんだけど、エミーもいっしょに最近出来たテーマパークへ行かない？」

テイルスは持ってきたチラシをエミーへ渡した。

「アルドール、早速舞い込んできたわよ。 チャンスが。」

エミーはアルドールの方へゆっくり振り返りながら言った。

「チャンス？」

「さっき言ってたやつよ。 ストレンジャーが来るならなおさら！！」

「！！！」

アルドールはまた顔を赤くしつつ口を手でふさいだ。

「どうしたの、二人とも？」

「ちょっとね、で、コレはいつ行くの？」

エミーはまたテイルスの方へ振り返り、言った。

「今日から三日後だよ。 集合場所は僕の工房。」

「了解、私達も行くわよ！」

偶然にしては出来すぎているチャンスが舞い込んできたアルドール。

恋なのかを確かめるべく、デートへの準備が始まった。

—続く—

別々のデートプラン

テトラクリスタルアイランド

一方、先にテイルスと分かれたストレンジャーはビリーブと共に島へと戻ってきた。

ストレンジャーはビリーブと一回別れ、ジョイの家へと飛んで行った。

北側のエリアは雪が溶け、綺麗な緑色の大地が見えていた。

その一角に立つ豪邸がジョイの家。

家に向かって飛び、窓から部屋を覗くとちょうどピスフリーとジョイがいた。

二人はPCを前に何か調べ物をしていた。

ストレンジャーは窓をノックした。

コンコンッ

『？ あらストレンジャー』

ジョイは窓を開け、ストレンジャーを部屋へと入れた。

「ずいぶん珍しい組み合わせだな。 何やってるんだ？」

「ちょっと調べ物をね。」

ジョイは使っていたPCの前に着くと、先ほどと同様に調べ物を始めた。

「ストレンジャーの方はどうしたんだ？」

調べ物をしているジョイを置いてピスフリーはストレンジャーに問いかけた。

「ああ、ちょっとテイルスにテーマパークへ行かないかって誘われてな。 二人も行かねえか？」

「どこのテーマパーク？」

調べ物をしていたジョイはいったん手を止め、ストレンジャーに聞いた。

「えっと、『ミラージュキャッスル』だったかな。 三日後に。」

「ミラージュキャッスル！？ あそこに行くの！？」

ジョイは驚きと嬉しさを隠せない様子で言った。

「どうしたんだ？ 急に」

「あ、そっか男子の間ではソコまで有名じゃなかったっけ。」

ジョイはPCに向き直ると調べ物を再開しつつ言い出した。

「ミラージュキャッスルって、最近出来た所なんだけど。 女の子の行きたいテーマパーク、ベスト1にいきなり輝いた所なの。」

ジョイはあるサイトを開くと二人に見せた。

「アトラクションは様々で、デートスポットとしても有名なの。 おいしいものも結構取り揃えてあるっていうし。 もちろんグッツも。」

「へえ、そんないい場所にタダでいけるのか。」

「え？ タダなのかストレンジャー？」

ピスフリーはサイトからストレンジャーの方へ向き言った。

「ああ、今団体で行くと一日タダで遊べるって。 テイルスが言ってたんだ。」

「ならいいじゃない、私達も行くわよ。」

「タダならなおさらな。」

「よし、決まりだな。」

二人の意見も一致し、二人も行くことにした。

「じゃあ俺、一回戻って報告してくるよ。」

「ああ、頼むぜ。」

ストレンジャーは再びバルコニーへ出ると、翼を広げ、飛んで行った。

「まさか場所までグットな所を選べるなんてね。」

「でもなんでそんなに人気なんだ？」

ピスフリーはジョイに聞いた。

「実はコレは雑誌の情報なんだけど、ソコのあるアトラクションからみえる風景をバッチリみたカップルが続々と出来てるのよ。コレが人気の理由。」

「だとすると、本当に二人が結ばれちゃう可能性が出たわけか。」

「そういうこと、その例の場所に、最終的に私達が誘導するのよ。」

「どうなることやら、だな。」

「じゃあビリーブにも協力してもらおうか。」

ピスフリーとジョイは多少苦笑しつつ、プランを考えて行った。

ミスティックルーイン テイルスの工房

再び工房へ戻ってきたストレンジャー

「戻ったぜテイルス。」

「あ、お帰りストレンジャー。」

工房へ戻るとテイルスのほかにもソニック、エミー、アルドールがいた。

「ソニック達も行くのか？」

「ああ、せっかくの誘い出しな。大勢で行こうぜ。」

「そっちはどうだった？」

テイルスはストレンジャーに報告を聞いた。

「こっちは俺とピスフリーとジョイとビリーブ、全員行くってさ。アルドールは？」

ストレンジャーはアルドールに問いかけた。

「う、うん。私も行くわ。」

「そっか、じゃあ計8人だな。団体として行けるか？」

ストレンジャーはテイルスに問いかけた。

「うん、団体はちょうど8人からだって。ギリギリだね。」

テイルスはチラシを見つつ言った。

「そういや、ナックルズが見当たらないけど。どうしたんだ？」

ストレンジャーは部屋を見渡し、言った。

「ナックルズは今回はパスだってよ。」

「なんか用があるんだって。」

「そっか、じゃあ仕方ないな。」

ストレンジャーは皆からの報告を聞き、納得した。

「じゃあ3日後だな。」

「うん。わかった。」

「先に戻ってるぜ、アルドール。」

「うん。またあとでね。」

ストレンジャーは皆に言うと、工房を出て行った。

「ストレンジャーは気付いてないみたいね。」

「ちょっと、ドキドキしました・・・」

ストレンジャーが出て行ったあと、エミーとアルドールは言った。

「さて、デートはどうなるかって所ね。」

「どうしたらいいんですか？」

アルドールはエミーに問いかけた。

「私はいつもと同じようにソニックと楽しむから、アルドールはなるべく、ストレンジャーとア

トラクションを楽しむのよ。」

「わ、わかりました。」

「二人ともどうしたの？」

二人が話していると、遠くでチラシを見て考えていたテイルスがいった。

「ううん、何でも無いわよ。」

「？」

「お前らもせっかくだから何に乗るか目星つけとけよ？」

「うん、ソニックと乗れば私はいいわよ☆」

エミーはいつもと同じテンションで戻っていった。

『このデートプラン、どうなるのかな・・・』

アルドールはちょっと不安そうにそう思っていった。

別々の島でデートプランを立て始めていた5人。

何も知らないソニックとテイルスとストレンジャーを除いて。

— 続く —

テトラクリスタルアイランド

エミー達との交流を終え、島へと戻ってきたアルドール。
時刻は夕方。 もうすぐディナータイムの頃。
島の中心の泉から出てきたアルドール。
だがそこには人影があった。

「やっと帰ってきたな。」

「お帰りー アルドール。」

出迎えたのはピスフリーとジョイだった。

「あれ？ 二人とも、どうしたの？」

「アルドールを待ってたに決まってるじゃん。」

「明日、ちょっと暇あるか？」

ピスフリーは率直に用件を言った。

「特に無いけど、どこ行くの？」

「デートの服を買いに行くに決まってるでしょ！」

ジョイはアルドールにブイサインを向けつつ言った。

「デ、デートってまだ決まったわけじゃないんだけど・・・」

「アルドール、私達アルドールの様子がおかしいことぐらい知ってるんだからね？」

「儀式をする前くらいからなんか変だったからな。」

「！！」

アルドールは凶星を付かれ、ちょっとドギマギ。
おまけに顔も赤くなっていく。

「そういうわけで、しっかり勝負服、用意しなくちゃね。」

「ジョイが近くにいい場所を見つけたんだと。 ストレンジャーのことはビリーブに任せたから。」

「わ、わかった・・・」

アルドールは顔を赤くしたまま承諾した。

「じゃあ明日の朝、ここに着てね。 じゃあねー」

ジョイは先に自宅へと戻っていった。

「アルドールも大変だな。」

残ったピスフリーはアルドールの元へ。

「お前は、ストレンジャーとの事、恋だと思うのか？」

「え？」

アルドールはピスフリーに言われたことがちょっとよく理解できていなかった。

「だから、確信できる所って意味。」

「う、ううん。 ちょっとお父さんに言われたことが気になっちゃって、それ以来ずっとこんな感じ・・・」

「なるほどな。 ま、頑張れよ。」

ピスフリーはそういい残すと、自宅へと帰っていった。

「確信、か・・・」

アルドールはそう呟いたあと、自宅へと帰っていった。

次の日の朝。

アルドールはいつもどおりに起き、仕度をして集合場所へと向かっていった。

「あ、来た来た☆ おはようー」

ジョイはアルドールの姿を見つけると、手を振って出迎えた。

「おはよう二人とも、早いわね。」

「ああ、なんとなく早く起きたからな。」

「私も同じくね。」

「そうだったの。」

「あ、そうそう、アルドール、ちょっとこっちから助っ人を呼んだわよ。」

ジョイは不意にアルドールへ言った。

「助っ人？」

「それは誰だかは行ってからの楽しみ。」

「？」

「じゃあそろそろ行こうぜ。」

ピスフリーはそういうと、ワープへの道を開き、入っていった。

そのあとを、ジョイとアルドールが付いていく。

ホワイトアクロポリス

「付いたー」

アルドールたちが来た場所は前回来たホワイトアクロポリスだった。

「あれ？ ここに来る予定だったの？」

「ええ、ここなら結構な店がたくさんあるしね。」

ジョイは二人の先に立ち、進んでいった。

「ジョイがメッチャこの店舗について調べてたんだぜ。」

ピスフリーはアルドールの近くで言った。

「そ、そうだったの・・・」

「あ、いたいた、ハイ。」

「あ、ジョイ。 おはようー」

ジョイに連れられ、来た場所にはなんとエミーがいた。

「あれ？ エミーさん、どうしてここに？」

「ジョイからちょっと連絡をもらってね、ここで勝負服を決めるって。」

「じゃあ助っ人って。」

「そ、エミーのことよ。」

ジョイは事前に用意していた助っ人を早速出した。

「でも知らなかった。まさかエミーさんとジョイが顔見知りだったなんて。」

「一回ストレンジャーと来た時にたまたま会ってね。そこで仲良くなったの。」

「私達結構仲いいしねー」

ジョイはエミーと楽しそうに言った。

「まあ確かに間性は似てるな。」

「さて、じゃあそろそろ始めましょっか☆」

「ええ☆」

二人はそういうと、

ガシッ！

アルドールの腕をつかんだ。

「え！？」

「レッツゴー！！！」

「レッツゴー！！！」

「キャ——————！！！」

そのまま二人はアルドールを引っ張りデパートへ直行していった。

『すごい勢いだな・・・』

ピスフリーは三人のあとを同じスピードで追いかけていった。

そしてそのままデパートにあるすべてのブティックを回り、アルドールに似合いそうな服を片っ端から手に取り、試着させ、買い物をしていった。

お金は女子三人がすべて出していた。

ピスフリーはというと、その様子を静かに追いかけて、見守っていた。

しばらくして・・・

「じゃあちょっとランチ買ってくるから」

「ここで待っててねー」

すさまじい買い物劇を終え、エミーとジョイは仲良くフードコート内へと入って行った。

ピスフリーは荷物を近くの席に置き、アルドールは少々フラフラしつつイスへと付いた。

「つ、疲れた……」

「そりゃ疲れるよな。 あんなにボンボン振り回されたんだから。」

ピスフリーは近くにあった給水気から水を取り、アルドールへ渡した。

「買い物がこんなに疲れるなんて思わなかった。」

「相手が悪かったなアルドール。 でも、そのかいがあって、いろいろそろったみたいだけどな。」

ピスフリーは買ったものの詰まった袋を見つつ言った。

中には服はもちろん、アクセサリやその他もろもろがギッシリ。

「ピスフリーは半分荷物持ちだったもんね。」

「多分そのために俺を連れてきたんだろ、ジョイは。」

「重くないの？」

アルドールはもらった水を飲みつつ言った。

「コレくらいなら大丈夫だ。 いつもトレーニングしてるからな。」

「そうなんだ。 すごいわね。」

「そうでもないさ。 アルドールだって、いろいろ悩んでるんだろ？ 俺から見たら、それはすごいことだと思うぜ。」

ピスフリーは不意にアルドールへ言った。

「そうなの？」

「悩みなんて俺にはソコまで付きまとうものじゃないからな。 ちょっとすごいと思う。」

「そうなのかな？ そうとは思わないけど。」

アルドールはピスフリーに言った。

「ま、さっき言ったことはそんな感じだよ。 その人がすごいと思っていることは、本人から見たらそんなことじゃないと思うって事。 すべては見方から変わるんだよ。」

「見方？」

「なんでも見方からすべてが変わるんだよ。 今回のことも、ストレンジャーのことも。」

「そうなの？」

「それによって、答えも変わってくる。 成功するかもしれないし、失敗するかもしれない。
ま、ストレンジャーのことだから、大体察しは着くけどな。」

ピスフリーは少し顔を上げつつ言った。

「まあとりあえず、二人も応援してるんだし、頑張ってきてよ。」

「でもまだ、確信が決まったわけじゃないんだけどね。」

「でも気になってることは確かなんだろ？ まあそれは、明後日の遊園地でわかるんだろうけど。」

「そうね。」

アルドールは少し元気が出た様子で言った。

「頑張ってきてよ。」

「うん。」

ピスフリーは軽く応援しつつ言った。

その後、荷物を全部ピスフリーへ持たせ、4人はそれぞれ、家へと帰って行った。

そして、ジョイはそのあと、アルドールの家へ押しかけ、アルドールの部屋で一晩中ファッションショーを行っていたのだった。

— 続く —

仕掛けとアタック

ミスティックルーイン テイルスの工房

約束の日の朝、海に朝日が昇り数時間が経過した頃。
テイルスの工房の前にワープゾーンが出来ていた。

「ふう、ようやく付いたな。」

そこから出てきたのは別の島、テトラクリスタルアイランドから来たストレンジャーだった。
そのあとから続々とアルドール達が出てきた。

「今日が約束のテーマパークへ行く日だもんね。」

「楽しみだな。」

そんな会話をしつつ、ストレンジャーは工房の扉を開けた。

「テイルスー、いるか？」

「あ、ストレンジャー、おはようー」

扉を開けると、テイルス達が出迎えてくれた。
すでにしたくは済んでおり、いつものスタイルのテイルス達が出迎えてくれた。

「じゃあ行こっか。」

「行きましょ。」

テイルスたちは先にメカエリアへと下りていった。
そのあとをストレンジャー、ビリーブ、ピスフリーが付いていく。

「アルドール、いよいよ今日だからね。」

「う、うん。 わかってる。」

いつもとはファッションが違うアルドール。
今日のためにジョイが選び抜いたファッションだ。

「頑張っ、ストレンジャーの事を頂いちゃいなさい☆」

「もう、そんなんじゃないんだけどな・・・」

アルドールは顔を赤くしつつ、降りていった。

『さてさて、今日は楽しむわよ☆』

ジョイはテンションを上げて、降りていった。

メカエリアへ付くと、そこには今回のために少し改良をし、たくさんの人が乗れるようになったカレントが待っていた。

「あれ？ カレント、改良したのか？」

「さすがストレンジャー、もう気付いたんだね。今回はたくさんの人が乗れるように、また少し改良したんだ。」

「そうだったのか。」

そういうと、ストレンジャーはソニック達が先に乗ったカレントへ飛び乗った。

遅れてやってきたアルドールとジョイも、カレントへ乗り込んだ。

「よし、皆乗ったね。 隔壁、オープン！」

テイルスがそういうと、カレントの前の隔壁が開きだし、目の前に海が広がっていた。

「カレント、発信！！」

テイルスはアクセルを踏むと、皆を乗せたカレントはメカエリアから飛び出し、海へそのまま目的地のミラージュキャッスルへと向かっていった。

テイルスたちが島へと向かっている頃、
テーマパークのある島の中央塔に人影が。

「よしよし、ようやく掛かったなソニック。」

そこには巨大なスクリーンに映ったソニック達を見るエッグマンの姿があった。

「念願叶ってワシ自ら作り上げたこのエッグマンランド、別名ミラージュキャッスルで、お前たちの最後を見させてもらおうかのう。　フォーッフォフオフォ。」

なんとこの島はエッグマンの作ったテーマパークだったのだ。
チラシをソニック達の元へ送ったのもエッグマンだ。
ソニック達をおびき寄せるために。

「よし、最初は普通のテーマパークのように振舞うとするか。」

エッグマンはモニターの画面を変え、仕事へ戻った。

その頃、テイルス達を乗せたカレントは、ミラージュキャッスルの近くの島にいた。
ここは海からやってきた客人のいわゆるパーキングエリアだった。

「みんなついたよー。」

テイルスがそう言うと、ソニック達は次々と島へと上陸した。

「ここがミラージュキャッスルなのか？」

「そこのモノレールに乗って、あそこの島に向かうんだって。」

テイルスが指差した方向には、島とミラージュキャッスルをつなぐモノレールがあった。

「あれに乗っていくのか。」

「じゃあ早く行きましょソニック！」

「私達も行きましょー」

ソニックの腕を引っ張るエミーを先頭に、ジョイ達が付いていった。

「じゃあ俺たちも行こうぜ。」

「う、うん。」

ストレンジャーはそういって、モノレールへと向かっていった。

「モノレールなんて初めて乗るね。」

「ああ、電車はあるけどモノレールは無かったからな。」

モノレール乗り場でモノレールを待つソニック達。

乗り場の窓から外を見ると、海が広がっていた。

「まるで海の上を走るみたいだね。」

「すごいな。 お、来たぜ。」

ストレンジャーが言うと、モノレールがちょうど入ってきた。

「早く乗りましょ！」

エミーはソニックをつかんで一番乗りでモノレールへ。

そしてソファへ座った。

そのあとを皆が乗り込み、ドアが閉まった。

モノレールは進み始め、海の上へ

「うわあ、海が綺麗！」

テイルスが窓の外をのぞきながら言った。

カレントから見る景色とはまた違い、楽しそうに言っていた。

「本当だな。 カレントと違って勝手に進んでくれるもんな。」

「それに景色もいいもんね。」

「でもすぐつきそうね。」

エミーが進んでいる方向を見つつ言った。

島と島の距離はあるにもかかわらず、モノレールはすぐに目的地へと到着した。

「さあ、行きましょ☆」

「GOGO！」

皆はそれぞれ楽しそうな顔をしつつモノレールをあとにした。

そして入場ゲートへ。

『いらっしゃいませ！』

係員のロボットがソニック達を見つつ言った。

『お客様は団体様ですね？』

「はい、団体です。」

『それではゲートをくぐって、行ってらっしゃいませ！』

係員はゲートを開け、ソニック達を誘導した。

その様子をカメラから見ていたエッグマン。

「よしよし、入場したな。これから恐怖のテーマパークを楽しむがいいわ！！」

エッグマンは満面の笑みを浮かべつつ言った。

ソニック達はそのあと、様々なアトラクションを楽しみ始めた。

ジェットコースターはもちろん、コーヒーカップにメリーゴーランド。

トリックハウスにゴーカートに遊覧船。

どんな感じの盛り上がりかはご想像にお任せします。

楽しい時間が過ぎてお昼を済ませ、ブレイクタイム。（夕方の中の時間）

「そろそろお茶にしようか。」

「じゃあ私達がちょっと買ってくるからね。」

「あ、俺たちも行くよ。」

事前に打ち合わせていたような感じのセリフを言いつつ、エミー達はアルドールとジョイを残して買いに行った。

「アルドール、そろそろ行くわよ。」

「！！ も、もしかして観覧車？」

アルドールは目の前にある巨大な観覧車を見つつ言った。

「そうよ、裏情報のあれはちょっとデマだったらしいけど、観覧車は別よ。　そこでアタックだからね！」

「ほ、本当にやるの？」

アルドールは落ち着かない様子でジョイに言った。

「もちろん、貴方とストレンジャーが二人っきりになるように私とエミーが仕組むから。　一周する間にアタックだからね？」

「わ、わかった……」

「お待たせ、二人とも。」

先に戻ってきたストレンジャーは二人に飲み物の入ったコップを持ってやってきた。

「？　どうかしたのか？　アルドール。」

ストレンジャーはアルドールの顔色がおかしいことに気づき、言った。

「え？　う、ううん。　何でもないよ？」

「そうか？　はい、ダーズリン。」

ストレンジャーはアルドールに紅茶の入ったカップを差し出した。

アルドールはそれを受け取った。

「ありがとう・・・」

アルドールは紅茶を飲みつつ、考えをまとめた。

『アタック、やるしかないわね。』

アルドールは観覧車を見つつ、決断をした。

— 続く —

ミラージュアイランド

時間はもうすぐ本格的な黄昏の時間。

テーマパークであるこの島にも夕日の光が差し込みカップルの人々が段々多くなってきた。

「そろそろ俺たちも帰ろうか。」

ソニックは一通りテーマパークをタダで満喫し、提案を出した。

「あ、まって、最後にあの観覧車に乗りましょ。」

エミーは目の前にある巨大な観覧車を指差して言った。

「そうね、そうしましょ。」

「皆もいいでしょ？」

エミーはみんなの方を向き、言った。

「ああ、俺たちは別に構わないぜ。」

「僕もいいよー」

「じゃあ決定ね、行きましょ！」

みんなの意見が一致し、エミーはソニックの腕を引っ張りつつ、観覧車の方へ向かっていった。そのあとをストレンジャー達が付いていく。

そのころ、エッグマンはというと、

「ニッシッシッシ、観覧車へ向かっていったなソニックよ。」

エッグマンは観覧車へ向かっていくソニック達を、モニターから監視していた。

「そこで決着をつけてやるわ！」

場所は戻ってソニック達一行は、観覧車の前へやってきた。

「じゃあ私達が最初に乗るね！」

エミーはソニックと共に先頭へ並んだ。

「じゃあ次は僕達に乗ろっか。」

「はい。」

その次をテイルスとビリーブがならんだ。

「じゃあ私達も乗らましょ。」

「おう。」

ジョイとピスフリーも並んだ。

「俺たちも乗ろうぜ。」

「うん。」

最後にストレンジャーとアルドールが並んだ。

順番はすぐに回ってきた。

次々と観覧車へ乗り込み、観覧車の旅がスタートした。

ゆっくりと回っていく観覧車。

ソニックとテイルスのペアは普通に観覧車を楽しんでいた。

だがジョイとピスフリーはちょっと違う楽しみ方をしていた。

「うーん、良く見えないわね・・・」

ジョイは窓にくっつき、下のゴンドラに乗るストレンジャー達を見ようとしていた。だがまだ回り始めたばかりなので、屋根しか見えない。

「さすがにまだ、見えそうに無いな。」

「あーん、肝心なシーンを見られるかしら？」

ジョイは一回諦め、ゴンドラのソファに腰掛けた。

「ま、気長に待つしかねえな。」

ピスフリーも、ジョイの向かい側のソファに腰掛けた。

一方、ストレンジャーとアルドールはというと、二人とも珍しく、おとなしく観覧車を楽しんでいた。喋らず、それぞれの窓を見ていた。

『ううー、エミーさんやジョイがせっかくチャンスをくれたんだけど、何を言っているのかわかんない……』

アルドールはストレンジャーの事を見つつそう思っていた。今日のストレンジャーは服は着ておらず、いつものスタイルでいた。視線は窓の外を見ていた。

『ううー、なるようになれ！！』

アルドールは決断し、口を開いた。

「あ、あのね、ストレンジャー。」

「ん？ どうした？」

窓の外を見ていたストレンジャーは話しかけられ、アルドールを見た。

「じ、実はさ……」

アルドールはもじもじしつつ言った。
ストレンジャーはそのままの顔で見ている。

「わ、私ね・・・！」

「俺のことが気になってる、ってか？」

ストレンジャーが不意にそう言った。
アルドールは凶星をつかれ、挙動不審な態度が一気に解かれた。

「確か、初夏のための儀式の頃だったかな。　なんか様子がおかしいと思ったけど、そういうことだったか。」

「？」

アルドールはポカンとした顔でストレンジャーを見ていた。

「アルドール、俺のことが気になってたんだな？」

「え！！！！」

アルドールは急に言われ、顔が真っ赤に染まった。

「じゃ、じゃあストレンジャー、知ってたの！？」

「今気付いたに等しいけどな。」

ストレンジャーはソファに座りなおしつつ、言った。

「実際のところ、俺のどこが好きなんだ？」

「え、えっと・・・」

アルドールは顔を赤くしたまま、考え始めた。

『えっと、やさしいところ？　スタイル？？　かっこいい所？？？』

でもコレ！ というものが見つからず、あたふた。

「その様子だと、特に無いみたいだな。」

ストレンジャーは苦笑しつつ言った。

「う、うん。 そうみたい。」

「ま、それでもいっか。」

アルドールの顔色は戻り、いつものアルドールが戻っていた。

「俺のことが好きなら、それでもいいよ。 また、好きな場所が見つかったら、告白しにきな。
俺が好きな人を見つける前にな。」

「うん！」

アルドールは笑顔で言った。

だが、

ガコンッ！

急にゴンドラが揺れた。

「キャッ」

「おっと。」

アルドールは急にゆれたゴンドラに、体制を崩した。

ストレンジャーはアルドールを支えた。

「な、何？」

「！ エッグマン！」

ストレンジャーはゴンドラの外を見つつ言った。

そこにはメカに乗ったエッグマンがいた。

ゴンドラはさっきのゆれで緊急停止したようで、止まっていた。

『フォーッフォッフォ。 久しいなあ、ソニック。』
『エッグマン！』

上のゴンドラの方からソニックの声がした。

『お前たちは袋のネズミじゃ、 もうすでに緊急装置が付けられ、ゴンドラは開かんわ！』
「何！」

ストレンジャーはゴンドラの入り口を開けようとした。
だがエッグマンの言う通り、入り口はビクともしなかった。
他のゴンドラからもあけようとする音が聞こえた。

『あ、開かないよ！』
『チッ、罨だったのか。』
『ここから出しやがれ！！』
『誰が出すものか！ このままお前たちを、海の藻屑と化させてもらうぞ！』

エッグマンはコンピューターを操作し、アームを変形させた。
U型だったアームは、スピントイプのカッターへと変わった。

『さて、一個ずつ海へと送ってやるわ！』

エッグマンはソニック達の乗っているゴンドラの隣から順に切り始めた。
幸いソニック達以外は誰も乗っておらず、被害はなさそうだ。

「このままじゃ私達、海の中よ。」
「ソニックは泳げないからな、海に落ちたら終わりだな。」

ストレンジャーはエッグマンの仕事スピードを見た。
1分に2個の割合で切除していた。

「俺たちが助けるしかないな。」
「でもどうするの？」

アルドールはストレンジャーに言った。

「ソニック達をまず助けるんだ。俺たちならまだ羽根があるから、エッグマンの攻撃を回避しつつ、助け出せる。」

「わかったわ。私もやる！」

アルドールは言った。

「よし、じゃあ行くぜ、青龍チェンジ！」

「朱雀チェンジ！」

ストレンジャーは手を胸の前に構え、言った。

アルドールは両手を胸の前に組み、言った。

するとそれぞれの体を光が包み、服がまとわれた。

「よし、行くぜ！」

ストレンジャーは剣を召還し、扉を叩き切った。

そして二人は、空へと飛び出した。

ガシャン！

「ん？ 何じゃ・・・ んのあ！！」

エッグマンは物音のした方に向いた。

するとそこには四神の格好をしたストレンジャーとアルドールが飛んでいた。

手には剣と杖が握られている。

「エッグマン、お前の好きにはさせないぜ。」

「私達がここに来た時点で、貴方の負けは決定しているのよ。」

「何を小癪な。お前たちに何が出来ると言うんじゃ。」

「俺たちにも出来ることはあるさ。」

ストレンジャーはそういと、ソニック達の乗ったゴンドラの元へ飛んで行った。

「破ッ！」

ストレンジャーは持っていた剣で扉を切った。

「ストレンジャー！ サクス！」

ソニックはゴンドラから脱出し、ゴンドラの上へ飛び出した。

アルドールはエミーを持ってソニックの元へ。

「ありがとう、アルドール。」

「どういたしまして。」

「ああ！ せっかく捕まえたのに！ 許さんぞ！」

エッグマンはアームをストレンジャーの元へむけ、攻撃を開始した。

「こんなもの！ 破ッ！」

ストレンジャーは持っていた剣で、アームを叩き切った。

「チッ、やはりその剣の切れ味は想像以上じゃな。」

「一応は学習しているみたいだな。」

ストレンジャーはその隙に、テイルス達とピスフリー達の乗ったゴンドラの扉も切った。

アルドールは飛べないジョイとピスフリーをゴンドラの上へ運んだ。

「さあ、役者はそろったぜ。」

「覚悟しな、エッグマン。」

「小癪な獣達じゃな！」

エッグマンはマシンに乗ったまま、ソニック達へ攻撃を開始した。

ソニックはエミーを抱え、エッグマンからの攻撃を避け、そのままゴンドラを走り降りた。

テイルスはビリーブを持ち、ゴンドラから降りていった。

ジョイとピスフリーはすでに四神スタイルへ変わっており、手には武器が握られていた。

「さあエッグマン、覚悟しな！」

「フン、お前たちにワシに触れられるものか！」

「それはどうかな！」

ピスフリーはそういうと大きく跳躍し、エッグマンの元へ向かっていった。

そしてそのままハンマーを振り下ろした。

「ハッ！」

「甘いわ！」

エッグマンはそういうと、その場から消え去り、ピスフリーの攻撃をかわした

「何！」

「甘いな白い虎よ。」

エッグマンはなんとピスフリーの背後にいた。

「覚悟！」

「チッ！」

ピスフリーは空中にいるため、身動きがとれず、エッグマンの攻撃を避け切れず、受身の態勢にはいった。

スカッ

「何！」

だがエッグマンの攻撃は当たらず、ピスフリーはその場から消えていた。

「どこじゃ！」

「後ろだぜ、おっさん。」

エッグマンの背後にはピスフリーを持ったストレンジャーが飛んでいた。

「助かったぜ、ストレンジャー。」

「コレくらいいいって。」

「チッ、小癪なやつらじゃ。」

エッグマンは振り向きなおし、体制を立て直した。

「今度はこちらから行かせてもらうわよ！」

ジョイはそういうと、持っていた銃をエッグマンに向けて発射した。

銃からは弾では無く、トランプが出てきてエッグマンの元へ向かっていった。

「甘い！」

エッグマンはまたその場から消え、ジョイの後ろへ。

「あ！」

「覚悟！」

「甘いです！」

エッグマンがジョイへ向けて攻撃をしようとしたが、さらにその背後にいたアルドールがエッグマンに向かって攻撃をした。

アルドールが持っていた杖はメカに突き刺さり、中に大量の水晶を噴射させた。

メカの内部からはもれた水晶が飛び出し、突き刺さっていた。

そしてそれと共に爆発音が、

ドカーーーーーン！！！！

「おぼえてろーーーー！！！！」

エッグマンはそのまま吹き飛ばされ、海へと落ちた。

破裂したメカから飛び出した水晶は粉々になって、ミラージュアイランドへ降り注いだ。

「まったく、エッグマンのせいで散々な目にあったわ。」

「せっかくのプランが台無しね。」

エミーとジョイは口々にそういって、遊園地の退場ゲートへ向かっていた。

「でもまさか、エッグマンの作ったテーマパークだったなんてな。」

「でもさっきの騒ぎで、しばらくは静かになりそうだね。」

テイルスとソニックもそう言った。

「でも楽しかったですよね。」

「ああ、久しぶりに騒いだ気がするぜ。」

ビリーブとピスフリーは今日の感想を言った。

「いい思い出だな。」

「そうだね。」

ストレンジャーの発言にテイルスが相槌を打った。

「で、ストレンジャーとはどうだったの？」

「そうそう、私も気になってたの！」

エミーとジョイはアルドールへ寄り添い、先ほどの成果を聞きに言った。

「あ、さっきのですか？」

二人「うんうん！」

二人は同じような顔をして、目をキラキラさせていた。
完全に期待の笑顔。

「和解して、終わりました☆」

二人「え——————！！！！」

成果の答えに二人は思わずブーイング。

「何で何で！？」

「いったい知らない間に何があったの！？」

エミーとジョイは顔を見合わせ、口々に言った。

「ヒ・ミ・ツ です☆」

アルドールはお茶目な感じにそう言い、ソニック達の元へ走っていった。

「あーあー、せっかく面白そうな結果が期待できたのに！」

「でもアルドール、元気になってよかったわね。」

「何を三人で話してたんだ？」

ソニックはアルドールが帰ってきた早々、言った。

「いえ、そこまでたいしたことは話していませんよ。」

「そうか、ならいいけど。」

ソニックはそれで終わりにし、モノレールへ乗り込んだ。

そしてモノレールを乗り終え、カレントのいる船着場へ戻ってきた。

「じゃあ帰ろっか。」

「そうだな。」

「早く帰って、シャワーを浴びたいわー」

ソニック達はそれぞれ言いつつ、カレントへ向かっていった。

「あ、ストレンジャー。」

「ん？ どうしたアルドール。」

アルドールはカレントへ向かおうとしていたストレンジャーを呼び止めた。

「あのさ・・・ 手。 つないでも、いい？」

アルドールはちょっと顔を下に向けつつ、ストレンジャーに言った。

ストレンジャーはそんなアルドールの様子を見て言った。

「いいぜ。」

ストレンジャーは笑顔でそう言うと、手を差し出した。

アルドールはその手を握った。

「帰ろうぜ、俺たちの島に。」

「うん。」

アルドールとストレンジャーは仲良く手をつなぎ、テイルスたちの待つカレントへ向かっていった。

そして、夕日と共に、その島をあとにした。

— E P I S O D E E N D —

サマーバケーションは恋の季節

<http://p.booklog.jp/book/88795>

著者：四神 夏菊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88795>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88795>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ